

わけっこパーク

事業主体 名称：わけっこパーク

事業実施場所 和気美しい森 ワケノワ

～事業を始めるにあたって～

里山の森林は放置され、耕作放棄地も増え続け、地方の支援環境の悪化の一途を辿っています。また、AI と共生する未来において、これまでより、創造力豊かで自ら課題を設定し、解決できる人材輩出が必要とされる中、子供達を取り囲む教育環境は、未だ戦後のまま止まっています。私たち大人は、これらの課題を解決していく責務があると考えます。

「自然とテクノロジーと共生し、日本の未来をリードする次世代の子どもたちの育成」という目的のために、3つの行動基準「自然の中でのびのびと過ごすこと」「様々な年代と共に遊ぶこと」「自分たちで遊びをクリエイティブしていくこと」が叶う場を作ります。そして、シンギュラリティを迎える時代に、自律して世を牽引できる人材育成を目指しています。

～事業実施内容～

体験型交流等事業

<第1回>

①事業名 わけっこパーク ～竹でバームクーヘン (&動画編集等)～

②参加人数 14家族(保護者(祖父母世代を含む)21名、子ども25名)

③日時 令和2年10月11日(日)、令和2年10月17日(土)

④場所 和気美しい森

⑤内容 講師：下本 隆氏、下鳥 誠氏

内容：自然の中でアウトドアクッキング編を覚えました。火の起こし方、竹の割り方、料理等の体験学習や地域交流を図った。周辺のゴミ拾いをして環境への関心を寄せました。その様子を撮影し、撮影の楽しさを知りました。撮った写真や動画を編集してコンテンツづくりや表現を楽しみました。デジタル社会の闇や脅威について問題提起し、参加者で考えました。



⑥活動の成果等 竹でダイナミックに生地を作るという作業は、大人も力と根気がいるものだったが、こどもたちが終始主体的に楽しんでいることが何よりの収穫でした。

また、講師のアドバイスをもとに、スマホやデジカメを使って親子で撮影して

いる姿も見られ、和やかに時間が過ぎていきました。撮った動画や写真をもとにアプリを使って思い出編集をしたり、過去のデータをよりよく加工するスキルを身につけたりして、参加者の満足度も高いものとなったようでした。

最後に、大人向けに IT リテラシーを上げていく必要性や SNS との付き合い方について、ディベートしました。世間の周りがそうだからうちもなんとなく、と受動的にデバイスを扱うことが最も危険で依存してしまうので、大人もスマホ等の光と音に反応しないように物理的に工夫することが提案されました。SNS においては子どもの成長年齢が一定の歳に到達するまで厳しく管理することが不可欠だという結論になりました。

<第2回>

- ①事業名 わけっこパーク ～ロボットプログラミング～
- ②参加人数 9家族（保護者（祖父母世代を含む）15名、子ども21名）
- ③日時 令和3年2月7日（日）、令和3年2月14日（日）、令和3年2月28日（日）
- ④場所 ワケノワ
- ⑤内容 講師：下鳥 誠氏
内容：問題に対する課題の設定、仮説、検証のプロセス体験を行った。テクノロジーと触れ合いました。レゴを組み立てて指示を出し、LED ランプを点灯させてみたり、ヘリコプターの羽を回転させたりと、学習コースに沿って完成させました。自由制作も行いました。



- ⑥活動の成果等 ソニーグローバルエデュケーション製ロボットプログラミングツール、KOOV を使用し、学習コースに従って実施しました。分からないことがあれば質問してもらい、大人がサポートしました。小さな子は自由に組み立てて、見立て遊びをしてもらいました。プログラミングには親子で興味があるが、数ある教材から何を基準に選べば良いか分からず高額で個人で購入するには敷居が高かったなので、触られてとても良い機会だったといった感想をもらいました。

<第3回>

- ①事業名 わけっこパーク ～テーマ「森で遊ぶと脳の成長が早いって本当ですか？」～
- ②参加人数 祖父母世代、保護者50名
- ③日時 令和3年2月23日（火）
- ④場所 Zoom オンライン&クラブハウス
- ⑤内容 ゲスト：西村 早栄子氏（まるたんぼう代表）、三輪 よし子氏（いのちのね）
内容：出産や子育て、教育など子どもたちの育みの一連の流れについて、自然

を隣にするとどのような効果が期待できるか専門家を交え大人たちが考える座談会を実施しました。ゲストは鳥取県智頭町で森のようちえんの運営をする西村さんと、同町で、自然分娩をしたいママたちをサポートするいのちのねの運営をする岡野さんの元で働く三輪さんを交えての対談を行いました。

⑥活動の成果等

過度の医療介入のない形で誕生し、自然の中で遊び、日常的に森を感じながら過ごすことで、子どもの脳に良い影響があるということ、科学的なエビデンスに基づいて解説してもらいました。自然環境を守り、子どもたちの健やかな成長を見守ることが大人たちの使命であり、芽を摘まない環境を整えようということ、を共通認識としてえました。また、常識に捉われず、大人たちが柔らかい頭で自立することが大切だという結論に導かれました。



地域ぐるみ会議の開催

<第1回> 会議のテーマ「和気のこれからの教育と自然環境保全と利活用について」

①参加人数

10人
参加者：自然保全団体に勤務するスタッフ、保護者、蜂取り師、移住推進員等



②日時

令和2年11月8日（日）

③場所

ワケノワ庭

④内容

環境整備や時代に合った教育に興味関心がない人、時間や心に余裕がない人をどう巻き込んでいけるか。地元の年配者たちの関心事は何か、今ある資源をどのように守っていくかなど様々なトピックでカンパセッションを行いました。

⑤活動の成果等

幼児期に外遊びをさせる重要性を知っているママパパをはじめ、町内で様々なフィールドで活躍する大人が参加しました。和気自然を守り、子どもの安全を守り、誰もが安心して挑戦できるような地域に盛り上げて行きたいと、改めて前向きな気持ち、団結できる会となりました。

<第2回> 会議のテーマ「5Gとの付き合い方、身の守り方。」

①参加人数

8人
参加者：町立高等学校講師、環境省ヒアリ相談アドバイザー、和気町地域おこし協力隊等

②日時

令和3年1月31日（日）

③場所

ワケノワ



④内 容 5G 新時代では社会は大きく変わります。エリア拡大は急速に進んでいるか、インターネットの歴史はわずか30年あまり。それが40億年かけてゆっくり進化してきた人間の脳に加速度的に迫ってきているという脅威。人類にとって最高の友にも最悪の敵にもなり得る AI と上手に付き合うにはどうすべきか、私たち大人が未来のためにできることは何かを真剣に考える必要があります。今こそ、地域力、自給自足が試される時です。

⑤活動の成果等 たくさんの環境問題や健康被害、幸福度の減少に直面する現代。これからの教育は、新学習指導要領だけではカバーできません。専門機関に任せて批判したり期待したりするのではなく、個人が当事者意識を持って、暮らしをより良くしていこうというモチベーションと努力が不可欠です。世界に何が起こっても適応して生きていける能力とタフさを子どもたちに身につけさせたいものです。自分で考えて行動できる大人になるには、どうしたら良いのか、等を議論しました。

小さな単位で暮らしをまわしていける「循環」のプライオリティを上げるために、より一層の仲間づくりが大切だという意見から具体的にどうつながりを作っていくかアイデア出しをしました。

常識を疑うこと、仮説を立てること、自分で調べること、検証すること、子どもに、私たち大人の背中を見せることがまずは大切で、子どもが与えられることは、愛情と環境だ、という共通認識も確認できました。

～事業を終えて～

○事業実施による効果

ますます、和気町が好きになりました。過疎地になりつつある地方のリスクとポテンシャルを感じながらも、小さな子どもたちの故郷がこの地になるもとの、親として嬉しさと羨ましさを感じています。

夫婦とも生まれ育った東京から離れ、「本当の豊かさ」を求めて絶えず挑戦し続けていますが、里山で虫を追いかける子どもたちの笑顔を見ること、答えはここにあるのだと確信しています。

これから、ますます移住者は増えるだろう。その時に、必ずといっていいほど壁にぶち当たるのは、横のつながり、縦のつながりです。わけっこパーク発足から3年が経ち、本事業の実施も含めて、一定の効果はあったと感じています。わけっこパークのことを知って、移住してきたという母子にであうことができました。今後も、次世代のリーダーの育成応援とともに、孤育てを防ぐ一助になっていきたいと思います。子どもたちの目に映るこの景色が、何十年、何百年と続くように、私たち大人が意識して、行動することが大切だと、心から思います。

○今後の課題・展開

協力者への対価支払いや、スタッフの時間的体力的余裕をどう持つか、が引き続きの課題となります。最終的には企画イベントという形ではなく、地域のつながりがしっかりと構築され、自然発生的に多様な人々がゆるく群れることができ、子どもの居場所も複数あり、つまり町全体で子どもを育てることができる環境ができることが理想です。

あらゆる状況を想定して、「わくわくする」暮らしができる人が増えるように、今後も自分ができることを考えていきたいと思います。

○まとめ

昨年からコロナ禍により、開催規模を大幅に縮小しました。そのため、大々的な告知を控えたため、情勢が落ち着いたら引き続き、地域の子どもたちを真ん中に、多様な世代を巻き込んで積極的に体験学習会やオンラインでの企画等を考えていきたいと思えます。

※補足

ロボットプログラミング学習においては、引き続き多くの子どもたちが体験できるように場の企画をしていきたい。幼稚園や学校、学童にも提案していきたいと考えています。